



ガラスの運動室

11月10日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

11月10日のおはなし「ガラスの運動室」

ナースに笑われた。

ガラスに衝突して、なおも進もうとしてもがいていたからだ。何かガラスのような透明な障害物に当たっていることはわかっているし、そのまま進めないこともわかっているつもりなのだが、私のからだはなおも前に進もうとする。ナースはわたしの肩にそっと手を置き、向きを変えるように声をかけてくれたのだが、その声は笑っていた。

とりたてて失敬だと腹が立つわけではない。ただプロではないなと思い、悪いが彼女の仕事ぶりへの評価は下がる。確かにいい年をした男がガラスに激突してもがいているのはコミカルな姿かもしれない。アマチュアなら笑ってしまってもいいだろう。でもプロはダメだ。プロはそういう垂れ流しのような感情表出をしてはならない。

私だって別にふざけているわけじゃないんだが。どういうわけかすぐに何かを忘れてしまう。こうしてテープに吹き込んでいる分には頭もきちんと働いているように思うのだけれど、ではずっと続けて覚えていられるかといふとなかなかそうはいかない。振り返って貯金に回せるのは本当に微々たるものだ。いつも貯金はほんのわずかで、いざ使おうと思っても、もうそこにはない。これは淋しいものだ。この年になっていまさら増やせるものでもないし。

おや。なぜ貯金の話をしていたのだろうか。

これはMDプレーヤーというらしい。それはテープじゃありませんよ、とカジマさんという人が教えてくれた。この人は自分から名乗ってくれるのでとても助かる。全然知らない人からなれなれしく話しかけられると緊張するからだ。最近特にそういうことが多い気がする。しかしMDプレーヤーだなんて名前は初めて聞いた。機械の扱いには慣れているのだが、そんな名前のものであったのか。知らなかった。新しい技術か何かなのだろうか。ウォークマンでカセットテープに録音できるようになっただけで十分に驚きだったんだが、言われてみればこの機械はずいぶん小さい。

ぐるぐる歩く。ここは運動室か何かなのだろうか。周囲がすべてガラス張りになっているのは、事故が起こらないように外から監視するために違いない。晴れた日は外からの採光も十分だし、今日のようなどんよりした天気でも、照明のおかげでとても明るいというわけだ。いま歩いているのは10人程度。みんなこの住人だろう。名前はさっきのカジマさん以外ほとんどわからないが、向こうからは私の名前を呼んで声をかけてくる。私はここではきっと有名人なのだ。

三人ばかり先を歩いている一人の女性の後ろ姿を見ていてぼんやりと何かを思い出しそうになる。知り合いかも知れない。けれどもうまく思い出せない。話しかけてみようか。いや、ついさっきまで一緒に話をしていたのではなかっただろうか。そう思うと彼女の顔も声もよく知っているような気がしてくる。やはり話しかけよう。追いつかなくては。

痛い。ガラスにぶつかってしまった。彼女の後ろ姿が遠ざかっていく。誰だったろう。私は進みたいのだが目の前のガラスが邪魔して進めない。この部屋はコーナーの部分わざわざ風変わりに処理してあって、私はそこに引っかかってしまったのだ。幅1メートル足らずの縦長のガラス壁面がギザギザと3つほど内側に飛び出していて、まるで巨人の階段が横倒しになったような状態だ。私はその階段を上ることができずコーナーに罨にはまってもがいている。

ナースに笑われた。

不意に何もかもを思い出す。向きを変えられずに苦勞をしている私にナースが一度しゃがんでみろと指示をした。それに従ったとたん、一気に情景が浮かび上がってきた。傘だ！ 傘を拾ってあの人に渡そうとしていたんだ。目の前でナースが困ったような顔をして、また思い出して

しまったんですねと言っている。何も困ることはないのに。

そう、思い出した。

あれは横断歩道の上だった。ふざけて彼女がバッグを振り回した。私をたたく真似をしたのだ。何かが飛び出した。折り畳み傘が落ちた。たくさんの色を使っているのにとってもシックなカラーリング。人のプレゼントを粗末にして！と軽口をたたきながら私がしゃがむ。傘を拾おうとしたんだ。そうしたらシオリが、そうだシオリだ、妻が振り向いて笑いながらこっちに戻って来た。口を開き、やっぱり何か冗談を言おうとしていた。そこへあのクルマが突っ込んで来た。シオリがはねとばされ、私はその場になぎ倒された。

何ですって？ 忘れろって？ 先に行くためには何もかも忘れなくてはならない？ 人のことも、もののことも、自分の名前も？ そうしなければこの部屋からは出られない、先に進めないって？ そうか、そうだった。それでわたしの頭はこんな風になってしまったんだ。彼女は忘れてしまったんですか？ 先に進むために。シオリはまだいますか、この部屋に。あの傘、私からのプレゼントだったんです。渡して上げたかったな。シオリも気に入っていたので、渡してあげたかった。ねえ、傘がどうなったかわかりますか？

おや。なぜ傘の話をしていただろうか。

(「傘」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ガラスの運動室

<http://p.booklog.jp/book/37972>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37972>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37972>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.